

## 「アーサー王と聖杯 ―二つの散文聖杯物語から―」

植 田 裕 志

アーサー王物語は13世紀になると散文による集成化、長編化が進む。「聖杯物語」(le Roman du Graal) という名のもとに、たかだか数世代という歴史的時間のなかでキリストの受難の物語、ブリトン人の王国の盛衰の歴史、そして騎士道冒険物語がアナクロニクに共存した物語世界が生まれる。

すでに Chrétien de Troyes の *Conte du graal* において、謎めいた漁夫王の神話はアーサー王の宮廷と結びつけられていた。アーサー王によって騎士叙任をうけたペルスヴァルは漁夫王の城である器物 (un graal) を目にしながら沈黙を守り、漁夫王の病を治すせっきくの機会を逸する。しかし Chrétien は漁夫王の神話の意味を十分に明らかにすることなく物語を未完のまま残した。彼に続く作家たちはこの謎の神話をもとに、一方ではその続きとなる探索の物語を、他方ではその前史たる由来の物語を書こうとした。その中でも Robert de Boron はキリスト受難の物語 (*Roman de l'Estoire dou Graal*) を書き、聖遺物の一つである器をグラアル (le Graal 聖杯) と呼ばせた。こうして Chrétien の épisodique な騎士道冒険物語に歴史的世界のパースペクティヴが与えられることになる。それは同時に宮廷風ロマンスの舞台であるアーサー王の世界に Geoffrey of Monmouth や Wace 以来のブリタニア王国の歴史世界を重ねることもつながったのである。

本稿では二つの比較的初期の散文聖杯物語を比べながら、作品全体の構図の中で聖杯の伝承・探索にどのような意味が与えられ、そこにアーサー王の世界がどのように関わってくるのかを見てみたい。いわゆる『ロベール・ド・ボロン三部作』(*Trilogie de Robert de Boron*, 以下『三部作』とよぶ) は Cerquiglini にならってモデナ版による。<sup>(1)</sup>『ヨゼフ』(*Joseph*) ではキリストの受難の時代、『メルラン』(*Merlin*) では予言者メルランの出生からアーサーの即位まで、そして『ペルスヴァル』<sup>(2)</sup> (*Perceval*) では聖杯探索の物語の後に短くはあるがアーサー王の最期が語られる。『三部作』よりは後に書かれた『ペルレスヴォー』(*Perlesvaus*) は筋の上では Chrétien の未完の物語を引き継いで聖杯探索が語られ、アーサーの最期にまではいたることなく終わっている。その意味では聖杯探索の物語の一つのヴァージョンと言え、<sup>(3)</sup>『三部作』の『ペルスヴァル』にはほぼ対応しているが、その筋を通して語られていることがらにはもっと広いパースペクティヴを前提としている。

## 1 聖杯の守護者

聖杯の伝承については次のような図式が両作品に共通している。磔刑にあったキリストの傷口から流れる血をうけた聖なる器 (le saint vaissel) は聖杯と呼ばれ、選ばれた者たちに護り伝えられていく。初めは Joseph (アリマタヤのヨゼフ) であり、二代目が漁夫王 (Roi Pêcheur) と呼ばれる者。そして三代目の最後となる守護者への委譲が待たれる。神によって聖杯の守護者に選ばれる名誉を求めて騎士たちは冒険の旅、聖杯探索の旅に出る。しかし漁夫王の後継者は予め神によって定められていた。それは Joseph や漁夫王の家系の者である。したがって聖杯の最後の委譲は予言の成就でもある。

『三部作』ではクレチアンが残した失敗の状況がほぼそのまま受け入れられ、それにあわせた前後の設定もなされている。漁夫王と呼ばれるのは Joseph の妹の夫 Bron のことである。Joseph の終わりで、Bron は聖杯を委ねられて仲間と共に西方へ旅立つ。このときすでに聖霊の声は聖杯が最後には Alain (Bron の息子の一人) がもうける男子の手に渡ることを予言している。続く第二篇で、Merlin は Arthur に Bron すなわち Roi Pêcheur がこの Irlande 諸島のこの世でもっとも美しいところに住んでいることを教えると同時に漁夫王神話に関わる予言をしている。漁夫王は重い病を患って体の自由がきかぬ身であるが、ある時が来るまでいかに歳をとろうとも、またその病にもかかわらず死ぬことができない。すなわちもっとも優れた騎士という名声を得てようやく彼のもとを訪れることができた者が、聖杯についてそれがなんのために使われるのか尋ねる時まで。その時、漁夫王の病は癒え、この騎士が新たにキリストの血の守護者となり、ブリタニアの不思議なことがら (enchantement) もすべて消え失せるのであろうと。ただしこの作品でも漁夫王の病の実態とその原因についての説明はない。第三篇で Alain の息子 Perceval は二度漁夫王のもとを訪れる。一度目は失敗する。叔父の隠者から自分こそ予言された騎士であることを教えられ、聖杯について問うべきことを知っていたはずであるにもかかわらず、母の教えを守ってみだりに口を開いてはならないと思ったために。七年余りを経た二度目の訪問では聖杯について問い、予言は成就する。漁夫王は三日後に死に、Perceval が新しい聖杯の守護者、新しい漁夫王となって騎士たることを辞めその地にとどまる。それから以後はもはや聖杯についても、Perceval についてもほとんど語られることはない。わずかに Arthur の最期の後に彼と Merlin が会う場面があるだけである。

このように『三部作』で語られる聖杯の物語では聖杯の伝承そのもの、聖杯が守護者となる資格を持つ者に伝えられ、聖杯に関わる予言が成就することに重要な意義が与えられている。Perceval が二度目の訪問でようやくその使命を果たした時、実質的には聖杯の物語は終わっているのである。

謎めいた漁夫王の神話は聖杯の守護者になるべき者の資質を試す機会として位置づけられている。予言の挙げる条件の一つは Joseph や漁夫王の血筋の者、さらに特定されて Alain の息子

ということであり、もう一つは最もすぐれた騎士としての世の名声を得た者であった。円卓の騎士たちが聖杯の探索に出発したのは、第一の条件を知らず、むしろ最も優れた騎士のみが成功するという名誉を求めてのことである。しかし成功するのは Perceval 以外にはあり得ない。しかも Perceval でさえもその生まれだけで十分な資格を持っているとは言えない。

では最初の訪問の時点で Perceval に何が欠けていたか。失敗の直後に彼が出会った娘は「あなたは聖なる器を守ることができるほどには賢くなく、徳もなく、また武勲と武勇と善行も十分ではない」と言<sup>(4)</sup>って彼を非難する。単に騎士として未熟であったということか。しかしそれほど明確ではないがもう少し具体的なことが推察される。それは戦士でありながら、神を敬い、キリストの教えに忠実であらねばならないということである。漁夫王の城での失敗以前、Perceval は再会した妹と叔父からそれぞれ殺し合いは大きな罪であり、やめるようにと説かれるが、その直後に見知らぬ騎士の挑戦をうけてこれを殺し後悔している。また失敗の後、7年の歳月を戦いに明け暮れて神のことを忘れる。ようやくある日聖金曜日の行を勤める一行に出会って正気を取り戻し、おじのもとを訪ねて二カ月を悔悛につとめる。それから漁夫王に再会するまでの彼の活躍は Blanc Chastel の騎馬試合での勝利しか語られていない。

聖杯の守護者が戦士の出身であることは初代 Joseph を Pilate の傭兵 (soudoyer) であったとして一貫<sup>(5)</sup>している。しかし実際には兵士としての Joseph のことは何も語られていない。キリスト磔刑の時から彼は敬虔な信者であり、社会から離れて信仰のみに生きる集団を作る。漁夫王 Bron については不明だが、Perceval もまた聖杯の守護者となった時には剣を置き、隠者となる。この作品では騎士たることと敬虔な信者であることとの本来的な矛盾がうかがわれる。しかしもう一方の聖杯物語『ペルレスヴォー』では聖杯の守護者こそ戦うことにおいて最も非情な戦士である。

『ペルレスヴォー』の物語は物語の時間からすれば漁夫王の城での失敗から後に位置する。しかし語り手や登場人物たちの言葉を通して、断片的にそれ以前のことを語られる。クレチアンの物語をさらに遡ると共に、クレチアンの設定した状況の意味づけまでも決定的に変えている。

Joseph が磔刑にあったキリストの体を敬い、キリストの血を受けた器をはじめとして受難に関わる品々を残したことはわかる。しかし聖杯がどのような経緯で西方の漁夫王の城にまで伝わるようになったのかはわからない。ただし漁夫王は Joseph の甥にあたり、Perlesvaus は漁夫王の甥である。最初に Perlesvaus が漁夫王を訪れる以前、この世には不幸の影はなかったようである。しかし彼が聖杯を目にしたが沈黙を守ったために、地上には大いなる災いが降りかかり、漁夫王は体の衰弱 (languueur) を患い、Arthur は無気力になり、そして Perlesvaus 自身も重い病の床につく身となった。物語が始まった時、すでにこうした状況にあったのである。だれかが漁夫王の城を訪れ、聖杯にまつわる問いを口にすれば漁夫王の病を治すことができる。しかしそれは優れた騎士にして神の加護を得た上で初めて可能となろう。Gauvain と Lancelot は

それぞれ漁夫王に会うことに成功するが、Gauvain はやはり聖杯を前にして口を開くことができず、Lancelot は聖杯を見ることもかなわなかった。Perlesvaus は病から回復して冒険の旅を再開する。しかし彼が漁夫王の城へ行く前に城は Roi du Château Mortel に占領され、聖杯がそこに出現することはなくなり、漁夫王は死ぬ。そこで Perlesvaus は城を攻め、Roi du Château Mortel を倒す。聖杯が再び出現するようになり、Perlesvaus が新しい城主となる。しかしまもなく城を後にしてキリスト教 (la Nouvelle Loi) を奉じぬ異教徒に対する戦いをさらに続ける。ついに Noir Hermite を倒し奪われていた数多くの首級を取り戻した後に聖杯城に戻る。歳月を経て母や妹を含めて城の者が自分を残してすべて死んで行った後、聖霊はもはやそこには聖杯は現れないと告げる。ほどなくかつて約束されていた船が現れ、彼をある島へと導くであろう。そして聖杯城は廃墟となる。

漁夫王の城での Perlesvaus の失敗にはいかなる理由も原因も与えられていない。Perlesvaus に向かって彼の失敗を責める言葉を口にする者もない。Perlesvaus の沈黙のゆえに生じた不幸の数々もその実態は謎めいており、いずれも彼が聖杯城の主となったことで旧に復したというわけではない。Arthur の無気力は彼自身による Chapelle Saint-Augustin 参詣によって治り、漁夫王は病が癒えることなく死んでいる。作者は Chrétien の物語の謎に説明をあたえるどころか、謎はいっそう神秘の中に隠されている。しかしこの謎を前提とした上で、Perlesvaus の物語は一つの明確な構図をとるのである。

Perlesvaus の使命はもはや優れた騎士となるべく精進し、予言通りに聖杯の守護者となることではない。漁夫王の城での gratuit とも言える失敗を除けば非のうちどころのない、すでにしてこの世でもっとも優れた騎士であった Perlesvaus は漁夫王の死後の聖杯の守護者としてキリスト受難の聖遺物の数々が納められている聖地を守り、異教徒を倒さねばならない。漁夫王の城の再訪問とは奪われた聖地の奪還である。従兄弟の Joseus を筆頭とする隠者たちを従え、Joseph がキリストの血を塗り込めた赤い十字のついた盾を持ち、額にやはり赤い十字の印のある白驃馬 (かつて Joseph のものであった) にまたがって戦う。その勝利によって漁夫王の城に聖杯をはじめとするキリスト受難ゆかりの聖遺物がすべて集まることになる。キリストの血を伝える聖杯と槍、ヨハネの首をはねた剣、Joseph の盾と白驃馬、Perlesvaus の母方の祖である Joseph と父方の祖である Nicodeme の遺骸<sup>(1)</sup>、漁夫王の遺骸。聖地の奪還を果たした上でなおも Perlesvaus の戦いは続く。なかでも Noir Hermite との戦いは『ニコデモ福音書』で語られるキリストの冥府下りに相当するものである。Perlesvaus にとってはもはや「人を殺すなかれ」という個人的倫理は問題とならない。彼自身がキリストの代理人であり、正義である。聖なる家系の者の仇を討ち、キリストの教えを弘めるためには血を流すことをいとわ<sup>(2)</sup>ない。Perlesvaus の父祖伝来の地を脅かした Sire des Mores は自分の手勢の11人の騎士の血を溜めた桶のなかで溺れ死ぬ。むしろ血が流されねばならない。

このようにキリストの血が納められた聖杯を守ることは二つの作品で異なっている。『三部作』では聖杯の守護者とはしばしば言われているようにキリストの血の守護者 (“cil cevaliers ara le sanc Jheucrist en garde<sup>(8)</sup>”) であり、そうして世俗を離れた信仰生活のうちにキリストの事績とキリストへの崇敬を後世に伝えるのである。しかし Perlesvaus の使命はキリストの血のすべてを守ると同時に、異教徒を相手に血を流し戦うことによってキリストの受難をみずからに引き受けることである (“soffrir painne e travail de la loi Jhesu Crist essaucier<sup>(9)</sup>”)。

## 2 円卓とメルラン

聖杯の探索に誰が成功するかということは初めから神の定めにあったことであるとしても、おそらくそれを知らぬ他の騎士たちも参加している。いや、後に定着した図式では、聖杯の探索とはまさしくアーサー王の円卓の騎士たちが試みる至高の冒険である<sup>(10)</sup>。しかし聖杯の物語における円卓の意義という点でここで扱う二つの作品の違いは著しい。『三部作』での重要性に対して『ペルレスヴォー』ではほとんど問題とならない。それは『三部作』で円卓の創設者とされている予言者 Merlin の扱い方の違いとも対応している。

『三部作』では円卓は Arthur の父 Uterpendragon の時代に Merlin の命によって設けられる。それは聖杯の伝承との関係においては三番目の食卓として、三位一体の秘跡との対応を完成させるものであった。第一のものは最後の晩餐の食卓 (Table de la Cène) である。第二のものはこれにならって Joseph が聖霊の命にしたがって設けた聖杯の食卓 (Table du Graal) であり、そのことは Joseph で語られている。その食卓に座を占めることが許されるのはかの聖なる器の恩寵をうけることのできた善人であり、ここに聖杯の一同 (compagnie du Graal) が生まれ、かれらによって聖なる器は Graal と呼ばれるようになる。また Joseph と Bron の間には空席が残される。Moys がそこに腰を下ろすやいなや彼は地に飲まれる。聖霊はその席がユダになむものであって、そこには Bron の血筋の三番目のものが占めることになることになると予言する。しかしその後聖杯の食卓がどうなったのかについては作品は何も語らない。Merlin は円卓を設けるにあたり、Uterpendragon にこの聖杯の食卓について話す。だからこそ三番目の円卓はこの世にあって人の関心の的となるものの一つとなり、王自身の名誉ともなる。そして王国の中からもっとも徳のある者たち (les plus prendomes) が Merlin によって選ばれる。円卓にもやはり空席が残され、Merlin はその席には Alain le Gros から生まれる者が座ることになろうと予言する。Arthur が王位につくと、Merlin はあらためてこうした円卓の由来を Arthur に話す。そしてついに Perceval が Arthur の宮廷を訪れる。しかし彼が残された空席についた時、彼自身は地に呑まれることはなかったものの、地面の石が割れる。そして聖霊の声は Perceval の思い上がりとそれを許した Arthur の過ちを責め、さらに漁夫王の病の話にまで及び、ついに聖杯の探索を命ずる。そこで Perceval と円卓の騎士たちが冒険の旅に出発する。後に Perceval

が使命を果たし聖杯の守護者となった日に、Arthur の宮廷では円卓の空席の割れた石がもとに戻る。

このように円卓は聖なる食卓の言わば地上のレプリカとしての価値が認められ、だからこそ聖杯の探索に参加するのは円卓の騎士である。三つの食卓、三代の聖杯の守護者というように三位一体の秘跡が重要なモチーフになっている。ところが『三部作』以上に三位一体の秘跡を物語を通して説くことに熱心であり、そしてまた聖杯の食卓というロベール・ド・ボロンのアイデアも知っていたはずの『ペルレスヴォー』の作者は聖杯の食卓とか円卓の聖なる由来などということについては何も書いていない。

『ペルレスヴォー』では Arthur 麾下の騎士たちが「円卓の騎士たち」(les chevaliers de la Table Ronde) とよばれることはしばしばあっても、Arthur の宮廷における円卓の役割についての説明はない。ただ王妃 Guenièvre の死後、Madaglan d'Oriande が円卓を返すように要求してくる—王妃は死に、Arthur には権利がなく、自分が王妃のもっとも近い親族であるからと言って—ことで、円卓が Guenièvre の嫁資であったことが推察される。これはたんに円卓の由来が曖昧であると言う以上に、円卓と聖杯との関係を疑わせるものである。また、この作品では円卓の騎士たち全体の課題としての聖杯探索という図式も曖昧である。たしかに Gauvain と Lancelot とによる聖杯探索の旅が語られている。しかし物語の初めに Arthur の宮廷ではこの二名以外はすべての円卓の騎士たちがいたことになっている。そもそもなぜ二人が、あるいは円卓の騎士たちがこの至高の冒険に出発することになったのかその経緯がわからない。それは Perlesvaus の失敗の前だったのか、後だったのか。読者が物語で初めて Gauvain や Lancelot に出会う時、すでに彼らは漁夫王の城をめざす冒険の途上にある。

次にそれぞれの作品で Merlin に与えられている役割を見てみよう。『三部作』の第二篇は彼の出生にまつわる物語ではじまる。彼は悪魔がある娘を夢の中で犯した結果生まれたのだが、そのたくらみと母親の敬虔さを知る神によって悪魔の手先となることから救われる。しかしその生まれから過去と未来のすべてを知る能力を持つことになる。後に Merlin は王国の正統な継承者たる Pendragon と Uter (Uterpendragon) 兄弟、そして Arthur が王位に即くのを助ける。Uterpendragon の不義の恋に力を貸し、Arthur の誕生にも関与している。しかし Arthur の即位後、もはや俗世にいることはできぬと聖杯にまつわる予言を残して王のそばを離れ、以前から自分の話を書き取らせていた Blaise のもとへ退く。したがって続く *Perceval* で Merlin が登場することはあまりない。まず、Perceval の最初の漁夫王訪問の直前、影となって彼にまといつき、まもなく予言が成就されるのだと言って彼を喜ばせる。つぎもやはり Perceval の前である。Blanc Chastel での騎馬試合からの帰途、Merlin は彼に一年経たぬうちに漁夫王の城へ導いてやろうと言う。Perceval が聖杯の守護者となった時、Merlin は Arthur の宮廷に姿を現し、漁夫の城での出来事を話し、また Blaise を Perceval のもとへ連れてくる。最後に Merlin

が登場するのは Arthur の最期の後のことである。Blaise に円卓の騎士たちがどのように彼らの時代を終えたのかを話すと、Perceval と Blaise に暇を告げる。この世の終わりまで死ぬことはできないが、もう人間に姿を見せることはできない。Perceval の住まいの外に自分の住まいを設けてそこに閉じ籠もる。それが『三部作』の結末である。

『ペルレスヴォー』には Merlin が登場しない。ただし、Arthur が Tintagel 城を訪れた場面、その僧が Arthur の出生の秘密を話す中に Merlin への言及がある。この作品では Arthur の父 Uter は Tintagel 城主の妻に恋したことになっている。Uter は Merlin の助けをかりてその城主に姿をかえて Ygerne と一夜を共にした。Ygerne はこの城で Arthur を産んだ。しかしこの大きな罪ゆえに城の大広間の地が割れ、そのまま深い裂け目が残っている。さらに僧の話では後に礼拝堂の外に Merlin の遺体を収めた柩が置かれたが、その直後に遺体は神によってか悪魔によってか、いずこかに運び去られて今はない。このように『ペルレスヴォー』での Merlin は Arthur の父の罪の加担者としてのみ思い出される。Merlin はすでに死んでいる。しかもその柩が罪の場所となった Tintagel 城に置かれたことは Merlin と聖杯との関係を否定するものである。

『三部作』における Merlin には物語の世界の中での行動とは別の次元で重要な役目が与えられていた。それはこの作品で語られていることが実際にあったことであると、物語の史実性を保証することである。第二篇の初めのエピソード、Merlin の出生と彼の母の裁きの終わり、まだほんの子供であった Merlin は自分の母の相談相手であった学僧 (clerc) Blaise に今後彼の話すことを書き記すように命ずる。その初めの話が聖杯の由来である。Merlin が Vertigier 以降、時の権力者と関わるようになってからは Blaise は Northumberland の地に隠棲し、そこをしばしば Merlin が訪れては出来事を記録させるようになる。Merlin は Blaise の書物が「聖杯の書」(Livres dou Graal) と呼ばれることになるとも言っている。そしてこうした設定に合わせて、本作品の物語は Merlin が Perceval と Blaise に暇を告げたところで終わっている。Merlin の務めは神の命に従って神に奉仕することであり、聖杯の物語を書物に残すこともその一つ、それゆえ彼の言葉に偽りはないということになる。

Merlin についてほとんど書こうとしなかった『ペルレスヴォー』の作者もこうした物語の史実性を見せかけに気を配らなかったわけではない。むしろ『三部作』の場合よりも手が込んでいいる。これも作品自体から読みとれるところでは、こちらの方は、まず聖霊が Josephes なる良き学僧 (clerc) に物語を書き取らせ、そのラテン語の書物がロマンス語(フランス語)に翻訳されたものが本作品ということになる。物語の中に Josephes は登場しない。しかししばしばこうした物語の由来に言及し、「Josephes の証言するところによれば」とか「この聖なる物語の語るところによれば」といった文句を挿むことによって、物語の史実性と聖性とに読者の注意を引いている。

『三部作』では Merlin とそして Merln によって創設された円卓とに、聖杯をめぐる出来事の歴史的時間の中での連続性、その三段階を示すと同時に、その最後の段階において聖杯の探索と Arthur 王の宮廷とを関係づけるという大きな役割が与えられている。Merlin はつまり仲介者である。悪魔の企みによって生まれたところを神に救われた Merlin はまず神の言葉を仲介して人間に伝える予(預)言者である。キリストの時代の出来事を Arthur の時代の人間に伝え、Arthur の宮廷と聖杯の探索とを結びつけ、神の定めに従って Perceval が聖杯の最後の守護者となることを助ける。そしてこの聖杯の物語を後世に伝える。しかし『ペルレスヴォー』の作者はあえてこの仲介者となりうる存在に活躍を許さなかった。それはおそらく『ペルレスヴォー』という聖杯物語の世界にはこうした人間の姿をした仲介者が必要なからである。いやむしろ作品の構想に反するものであったと言えるかも知れない。Joseph にはじまる聖杯の家系の者だけが神の特別の恩寵を受け、聖杯の事業に参加することができる。死せる者もその遺品によって参加する。そこに他の人間の仲介は要らない。まして出自の怪しい Merlin であればなおさらであろう。こうして『ペルレスヴォー』では聖杯の世界とアーサーの世界とは峻別されている。

### 3 アーサー王

どちらの作品においても Arthur はキリスト教を奉ずる者である。しかし、すでに見たように、基本的に二つの作品では聖杯の探索ないし事業にたいする Arthur の位置は異なっている。そこでこの違いを Arthur の側から見てみよう。

『三部作』においては若き Arthur が神に選ばれて王位に即くことが Merlin で語られている。石にささった剣を抜くエピソードである。キリスト降誕祭、キリスト割礼の祝日、聖母お潔めの祝日、復活祭、そしてペンテコステの即位式と、祝日ごとに剣を抜いてみせて Arthur は彼こそが神によって選ばれた者であることを諸侯に認めさせる。続く Perceval は Arthur 賛辞の言葉で始まる。Arthur こそもっとも名望高い王であり、その宮廷に一度は加わらずして本物の騎士とは言えない。そしてだからこそ Perceval の父は息子を Arthur のもとへ行かせようと考えたとする。Perceval は Arthur によって騎士の叙任を受け、おそらくしばらくはそこで修行を積んだのち、Arthur 主催の騎馬試合にも参加する。そして円卓の騎士たちと聖杯探索に出発する。しかし以後、Perceval が漁夫王の城での課題に成功するまで、Arthur 自身はその宮廷にあって物語の背景に退く。Perceval は冒険の途上で彼と戦って降参した騎士たちをそのたびごとに捕虜として Arthur のもとへ行かせる。Arthur は送られて来た者たちの話を聞いた後に彼らに自由を与える。こうして Perceval は彼の武勇を Arthur の宮廷に知らせるのだが、それはとりもなおさず Perceval と Arthur の関係を確認するものである。すなわち騎士叙任による個人的な恩義の関係である。それゆえ Perceval が聖杯の守護者となり、騎士道を退いた時、この



関係は消滅する。そしてそれから今度は Perceval の方が物語の背景に退き、Arthur の遠征以下、その最期までが語られる。

この作品では、聖杯探索の終わりと Arthur の最期との間に間接的とはいえ因果関係が与えられている。聖杯探索が成就し、ブリタニアの不思議 (enchantement) がすべて消失した時、もはやブリタニアは騎士にとって武芸を試す冒険の地ではなくなった、そこで Keu らの進言を入れた Arthur が騎士たちを率いて大陸に渡るようになったというのである。<sup>(11)</sup> もはや個人的な冒険の旅ではなくて王国の名誉と野望をかけた戦争となる。しかしフランスを制圧し、さらに皇帝の位を求めてローマへ出発という時に、ブリタニアで Mordred が謀叛を起こし、反乱軍との戦いで、Gauvain にも命を落とし、ついには Arthur も瀕死の傷を負う。そして Arthur の帰還の伝説—Avalon に運ばれた Arthur は傷を癒していつの日かまたブリタニアに戻ってくる—が付け加えられている。

『ペルレスヴォー』の物語の筋そのものは Arthur に始まる。このときすでにかつては豪華な宮廷を開き信望のあった王は謎の無気力に陥り、騎士たちも彼のもとから離れている。しかし最初のエピソード、Arthur の Chapelle Saint-Augustin 参詣の結果、王は気力を回復する。以後、Perlesvaus による聖杯の奪還までは『三部作』の場合と同様に、物語の背景に退く。しかし注目すべきことに、Arthur は Gauvain とともに聖杯城を訪れることになる。そしてその王の不在の間に王が死んだという噂が流れ、ために王妃 Guenièvre が死に、王国は外敵の脅威にさらされる。聖杯城からの帰還後の Arthur の問題は、宮廷での内紛 (Keu, Brien) と異教徒勢力に対する王国の防衛である。大陸への遠征とか、皇帝の位をかけた戦いというような話ではない。しかも内政上の問題に完全な決着を見ぬまま、また Arthur の死も語られぬまま物語は終わっている。

物語が始まる以前の Arthur にまつわる話は先に言及した彼の出生の秘密だけである。他方、物語が終わった後の Arthur については彼の死が予告されている。Lancelot は Ile d'Avalon で Guenièvre の柩を見つけて悲嘆にくれるが、そのそばのもう一つの柩には Arthur が葬られることになっているという。これに合わせるように、作品の最後で改めて作品の伝承が述べられる時、物語がラテン語からロマン語に翻訳されたのは Ile d'Avalon であり、そこに Arthur 王と王妃の遺体があると書かれている。<sup>(12)</sup> こうして『三部作』にあった死者の国たる異界 Avalon がこの世のもの、おそらく Glastonbury となり、Arthur の不死と帰還の伝説は否定される。異界の島へ船出するのは Perlesvaus である。

『ペルレスヴォー』での聖杯と Arthur との関わりは Perlesvaus による聖杯城奪還の前後に分けて見ることができる。聖杯城奪還での Arthur の役割はきわめて間接的であるが、しかしまた重要なものであったと言える。間接的といっても『三部作』の場合のように、聖杯の守護者となるべき Perceval との騎士叙任に基づく個人的な関係や、円卓の騎士たちを聖杯の探索に出

発させたというのとは意味が違ふ。『ペルレスヴォー』で主人公が登場（再登場）するのはおよそ全体の三分の一ほど読み進んでからのことである。それまではこの主人公が登場し、さらに聖杯の事業を遂行する、そのための準備となっている。まず Arthur から物語が始まり、Arthur が氣力を取り戻し、聖霊の声に命じられた通りに久方ぶりに宮廷を開く。こうして中断していた aventure の時間が再開する。そしてその宮廷へ *Damoiselle du Char* が Joseph の盾を預けにくる。物語は Arthur のもとを辞した *Damoiselle du Char* を追ひ、そして漁夫王の城をめざしてさまよう *Gauvain* に出会う。こうして *Gauvain*、つぎに *Lancelot* と、彼らの冒険の旅を通して、冒険そのものとは別に、漁夫王のこと、聖杯を獲得すべき騎士のことが話題になる。とりわけ *Perlesvaus* の妹 *Dandrane* が領地の危機を救うためにと兄を探しに旅に出てからはなおさらである。物語は読者に対してはまだ現れぬ主人公と彼の使命とについて語る。Arthur はそうしたことが語られるきっかけとなっているのである。物語に登場した *Perlesvaus* は Arthur の宮廷を二度訪れる。二度の訪問にはそれぞれ意味がある。一度目は夜陰に紛れて Arthur のもとへ Joseph の盾を取りに来た時である。Arthur は彼と認めるが、そのまま去って行かせる。ここで Arthur の宮廷は聖杯を獲得すべき騎士の盾の保管場所となっていたことが確認される。と同時に、筋の上ではそこから *Perlesvaus* 探索が始まる。Arthur のもとには兄を探す *Dandrane* が来ていたからである。*Gauvain* と *Lancelot* が出発し、数々の冒険の後、二人して *Perlesvaus* に出会うと、そこからは *Perlesvaus* による父祖伝来の地を守る戦いへとつながっていく。その戦いは聖杯の家系のために戦う *Perlesvaus* にとってまず聖杯の奪還の前に果たすべき重要な課題である。二度目に *Perlesvaus* が Arthur のもとを訪れたのは、結果的に聖杯城奪還の戦いへとつながる。結果的にというのは *Perlesvaus* が *Gauvain*、*Lancelot* とともに Arthur のもとを出発した目的は *Chevalier du Dragon* を倒すことであつたからである。物語の筋を錯綜させることに巧みな作者にとってそこは筋の重要な結び目であつた<sup>(13)</sup>。それまでの伏線の一つとして *Chevalier du Dragon* は Arthur を憎み、脅かす敵となつてゐた。また他方、彼を倒してある騎士の復讐を遂げるべく *Perlesvaus* を探す娘が登場してゐた。ところがそのあわれな騎士というのは *Perlesvaus* の叔父のひとりに他ならない。*Chevalier du Dragon* は Arthur と *Perlesvaus* にとって共通の敵である。しかし実際にこの敵を倒すのは *Perlesvaus* であり、かれがさらに馬を走らせて進むうちに *Pelles* の庵に行き着き、そこで聖杯城へ向かうことになるのである。したがつてこの第二の Arthur 訪問も間接的に *Perlesvaus* が使命を遂行する重要な契機となっている。

聖杯奪還の直後、Arthur の宮廷では太陽がもうひとつ現れる。<sup>(14)</sup>それは隠れてゐた聖杯が再び聖杯城に姿を現したことを意味する。そしてその時に聞こえてきた聖霊の命に従つて、Arthur は聖杯城を訪れ、聖杯を目にする。それは聖杯の行列ではなく、聖杯の秘跡に与かることである。聖杯は五つの形状 (*muances*) に変化する。最後はカリス (聖杯) の中にあつた。そこで

Arthur は聖杯城から戻ると、「その当時は Arthur の国には知られていなかった」カリスとそして鐘とを国内に広めることになる。しかし Arthur が Perlesvaus の戦いと無縁であることには変わらない。もはや Arthur と円卓の騎士たちが Perlesvaus と出会うことすらなくなるだけに、かれらが一つの物語の世界にありながら別々の世界で生きているかのようなのである。

ともに聖杯の物語でありながら、聖杯の世界とアーサー王の世界との関係と言う点で『三部作』と『ペルレスヴォー』とでは基本的に異なっていることは明らかであろう。『三部作』ではまずひとまずひとつの歴史的時間の枠組みがあり、その中で聖なる物語世界と俗なる物語世界とが並存している。それら二つの世界は歴史の進行に従って交互に展開する。Joseph の時代、Arthur の即位に至るブリタニアの王国の歴史、聖杯の探索、そして Arthur の最期。ただし聖杯の探索が語られる時には Arthur の世界が、そして Arthur の世界が語られる時には聖杯の世界がそれぞれ影のように並立している。聖杯の物語の意味はキリストの聖遺物がある資格のある者へと守り伝えられること、それが予言通りに行われることにある。Arthur の世界は予言者 Merlin を仲介してこの予言の成就に参加する。しかし予言が成就した時、すなわち Perceval が聖杯の守護者となり漁夫王の城に落ち着いた時、聖杯の物語は終わっている。Arthur の最期の影にある聖杯の世界とは単に Perceval の存在そのものでしかない。Perceval は隠栖し世俗を離れているもののまだこの世にいる。

これに対して『ペルレスヴォー』は物語の筋からすればいかにもクレチアンの続編のように始まり、結末では Arthur 王国の不安の種はそのままだに残っている。これは作者がかれの構想による聖杯物語に合わせてクレチアンの物語の中断した筋を利用し、また Arthur 王国を扱ったものの、それにもかかわらずクレチアンの設定に変更を加えざるを得ず、また Arthur の最期を語る適当なストーリーを考えつけず中途半端なままに終わったということになるだろうか。しかしこれを便宜主義的といって済まさず、作者の描いた構図に注目するならば、つまり作品自体が明確に聖杯物語の始まりと終わりとを宣言しているのに従ってこの作品をひとつのまとまりとして見るならば、『ペルレスヴォー』独自の物語世界が見えてくる。聖杯の世界は歴史的時間の世界、俗なる世界をまさしく越えたところにあると言えようか。この作品で聖杯の物語とは聖杯の血筋の者がキリストの受難を繰り返し、キリスト教を広め異教徒を倒すことに意味がある。クレチアンの物語で語られた漁夫王の城での失敗を謎のままに残し、むしろこれを暗黙の前提として物語は始まる。まず聖杯の守護者となるべき者の出現が予言され、その探索が行われ、そして彼すなわち Perlesvaus は聖杯を奪還する。さらに一族の者の仇や異教徒勢とを相手に戦い続ける。そしてこの事業が終わった時、聖杯も Perlesvaus も地上を去り、異界へと向かう。こうした聖なる世界に対して Arthur の世界は歴史の世界であり、俗世である。Arthur は聖杯の事業そのものには参加しない。せいぜい準備をするほどのことしか関わりえない。むしろその恩恵を

うけるものである。しかしまた聖なる世界の物語が語られるためには必要な物語世界であったといえよう。作者が Arthur の最期を書かなかったというのは、作者にはうまい結末が見つけれなかった、つまり《la fin du Perlesvaus n'est pas adroite》<sup>(15)</sup>というよりも、むしろ作者にとって Arthur 王国の最期など、それほど重要なことと思えなかったということではないだろうか。

## (注)

- (1) Ed. B. Cerquiglini, *Le Roman du Graal, manuscrit de Modène*, Paris, 1981 (coll. 10/18). なお『ロベール・ド・ボロン三部作』の作者に関する問題は何を作者と考えるかという点からしてすでに議論となるところである。まず Robert de Boron という名を作者名とする韻文版の『ヨゼフ』(*Le Roman de l'Estoire dou Graal*)と『メルラン』(初めの一部して残っておらず、むしろ散文版からその存在を推定されている)があり、それが散文に書き直され、さらに『ペルスヴァル』の部分が加えられたのであろう。もちろん全体にわたって Robert de Boron より後に手が加えられていると思われる。Cerquiglini があえて“par Robert de Boron”としてモデナ写本を刊行したのは誤解を招きやすいが、中世の読者の立場にたったものとして評価されるべき試みである。Voir A. Micha, *Etude sur le Merlin de Robert de Boron*, pp. 6-29.
- (2) Ed. W.A. Nitze et T.A. Jenkins, *Le Haut Livre du Graal, Perlesvaus*, Chicago, 1932-1937.
- (3) 代表的な散文の聖杯探索物語 *Queste del Saint Graal* (*Cycle du Lancelot-Graal* の一篇)では主人公として Perceval にかかわって Lancelot の子, Galaad が登場しており、本稿で扱う二作品とは違って、宮廷風恋愛 (amour courtois) と聖杯探索との関係が重要な主題となっている。
- (4) Ed. Cerquiglini, p.248(《tu n'es mie si sages ne si preus ne n'as tant fait d'armes ne de proeces ne de biens que tu aies en garde le precieus vaissel》).
- (5) 聖書のアリマタヤのヨセフはたとえば「名望の高い最高法院の議員」(『マルコ』15:43)であり、「アリマタヤ生まれの金持ち」(『マタイ』27:57)である。
- (6) 『三部作』の Perceval は父方の祖父が Joseph であるが、母方の系統については何も語られていない。Perceval の父 Alain は貞潔を誓った身でありながら彼がもうける子が聖杯の守護者となることが予言されている。キリストと同じ処女懐胎による生まれが示唆されている。これに対して Perlesvaus は母方の祖父が Joseph であることに加えて、父方の祖先がやはり Joseph と同じくキリストの受難に立ち会った Nico-dème となっており、血筋の点では Perceval 以上に聖杯との関わりが深い。
- (7) ここには十字軍の思想との明らかな共通性がある。F. Bogdanow は Saint Bernard の説教の言葉との対応関係を指摘して、作者には「十字軍兵士の間熱意をかきたてようとする意図があったのだろう」と考えている(《Le Perlesvaus》, in *Grundriss der romanischen Literaturen des Mittelalters*, IV/2, Carl Winter, 1984, p.21-67)。ただし、*Perlesvaus* では聖なる戦いに血を流すのは定められた血筋の者だけにのみ与えられた特権であることに注意したい。
- (8) Ed. Cerquiglini, p.194.
- (9) Ed. Nitze, 1.5.
- (10) *Queste del Saint Graal* では円卓についた騎士たちの前に聖杯が現れ、そこから聖杯探索が始まる。
- (11) 聖杯探索の終了と Arthur の最期との関係づけについては *Lancelot-Graal* よりも『三部作』のほうが明瞭である。Voir Jean Frappier, *Etude sur la Mort le Roi Artu*, troisième éd. Droz, 1972.
- (12) *Perlesvaus* では Ile d'Avalon が Glastondury を指すことは Mares Aventureux という言い方からも確かなようである。Glastonbury 修道院は沼沢地にあった。Nitze は作者がこの修道院と関わりのある人間

であると推定している (*Perlesvaus*, Ed. Nitze & Jenkins, Tome II, p.45-73)。Glastonbury 修道院はアーサー王伝説の Avalon を Glastonbury であると主張し、また1191年頃にはアーサー王の遺体がそこで見つかったという宣伝をしている。このアーサー王の遺体発見の話には、巡礼者を招き寄せて多額の収入を得ようという修道院の意図とアーサー帰還伝説を否定することによってプランタンジュネット王朝に敵対するブリトン人の力を弱めるという政治的意図とがあったと推測されている (リチャード・バーバー, 『アーサー王』高宮利行訳, 東京書籍, S.58, p.85-101)。

- (13) *Perlesvaus* の物語の筋はいわゆる *entrelacement du récit* の技法によってきわめて複雑に錯綜したものとなっているが、それはただいたずらに物語の筋を脈絡なくあちらこちらへと伸ばしていくものではなく、ここに挙げた例のようにしばしば断片的な事実がしだいに一つの意味をなし、別の筋と関係してくる。Payen はこの点で *Perlesvaus* は同じ技法によって書かれている *Lancelot en prose* にくらべて “*mieux architecturé*” と述べている。J.-C. Payen, 《L'art du récit dans le *Merlin* de Robert de Boron, le *Didot Perceval* et le *Perlesvaus*》, Romance Philology XVII, 1964, p.575.
- (14) 聖なる権威と俗世の権威とを二つの太陽によって表す象徴表現はダンテにもある (『煉獄篇』XVI, 107)。
- (15) Payen, *op.cit.*

注記 本研究は、文部省科学研究費補助金 一般研究(B) (課題番号 63450062) による。